

外国人生徒におけるカタカナ英語使用の研究

日本語教育領域 山田英里

キーワード： 外国人生徒、カタカナ英語、会話分析

1. はじめに

多文化多言語社会が進んでいる中、日本語母語話者と非母語話者が接触する場面が広がっている。接触場面での円滑なコミュニケーション能力の育成が重要視されている。コミュニケーション場面において、聞き手が違和感を受ける不自然な言語使用がみられる。それは文法的な誤りではないため、聞き手にも話し手にも誤りだと認識されにくく、聞き手を疲れさせたり、戸惑わせたり、失礼だなどと思われる可能性がある。

本研究は、外国人生徒における日本語コミュニケーションの実態を探り、課題を明らかにする。特に、日本語の第一言語話者との日本語会話におけるカタカナ英語の使用に焦点を当てる。ここでいうカタカナ英語とは、英語由来の外来語を日本語に直した言葉である。外国人生徒と日本語の第一言語話者の自然発生的な日本語会話、又はテーマに沿った日本語会話データを使用して分析する。外国人生徒の日本語コミュニケーションを分析し、彼らの円滑なコミュニケーション能力の育成をねらいとする。外国人生徒の日常的な日本語会話を分析することで、今後の日本語教育の在り方、また日本語教育のためのコミュニケーション研究に役に立つと考える。

2. 先行研究

本章では、論文に関する先行研究について述べた。近年、外国人生徒の日本語学習における取り組みは、さらに進められている。愛知県の取り組みとして、日本語指導に対応する教員の配置や外国人児童生徒の母語が話せる支援員、また放課後学習支援をする教室が増加している。筆者は実際に、放課後日本語教室で日本語支援ボランティアとして外国人生徒に日本語を教えている。彼らと日本語会話をする中で、違和感を受ける不自然な言語使用がみられることがある。それは文法的な誤りではないため、誤りだと認識されにくい。日本語母語話者と非母語話者が国際化に伴い接触する場面が広がっていることから、円滑なコミュニケーションをとることが重視されている。奥野(2012)は、コミュニケーション場面において、非母語話者は文法だけでは説明できない問題点がみられると指摘している。1. 誤解をまねく表現形式の使用、2. その場にふさわしくない言語形式、3. 言語行動様式の無知である。すでに知っている表現形式をコミュニケーション場面で活用し、それが時に失礼に聞こえたり、日本語を理解していないと思われたりするなどの恐れがある。実際に、外国人生

徒と会話をする中で、彼らの意図に反して幼稚な日本語であったり、正しい日本語の発音ではない言葉を使用したりするなどいくつか課題がみられる。外国人生徒の実態を把握し、彼らの日常生活における会話を分析することにした。

3. 現状と課題

外国人児童生徒の実態として、日本語指導が必要な児童生徒は国際化に伴い増加している。また、本研究の愛知県Y市にある公立高校に在籍する日本語指導が必要な生徒も増加傾向にある。そこで、日本語指導が必要な外国人生徒12名を対象に調査を行った。日本に滞在して3年から6年の生徒たちである。彼らは比較的、日本語を流暢に話すことができるが、英語や母語を交えて会話することがあり、どのような日本語を使用するのか迷い、それがカタカナ英語の場合、時に最初の発話が英語的発音で発することがある。彼らは週に一回、放課後日本語教室で日本語を学習している。放課後日本語教室とは、日本語能力試験のレベル別に分かれており、語彙・文法・漢字・読解などを学習する教室である。指導には、N高校の教諭、外国語支援員3名や日本語支援ボランティア3名が日本語を教えている。

4. 調査結果

本章では、外国人生徒と日本語の第一言語話者の日本語会話を文字化し、カタカナ英語使用に焦点を当てて分析した。本研究で分析されたデータは、愛知県Y市にある公立高校の放課後日本語教室に通う外国人生徒と日本語の第一言語話者の日本語会話である。会話録音時間はそれぞれ5分から15分で合計約5時間の会話である。録音した会話は文字化され、データの分析はトランスクリプトを参照にし、繰り返し検証しながら進めたものである。調査結果から明らかになったことは、彼らはカタカナ英語を発する場合、大抵は日本語の発音で発していた。しかし、使用言語が英語を含む生徒5名は言葉探しの末、カタカナ英語の場合、最初の発話が英語的発音で発することがあった。カタカナ英語を英語的発音で発した後すぐ、自己修復を行い日本語の発音に言い直していた。また、英語的発音で発した後、日本語の第一言語話者が日本語に言い直していたという場面が多くみられた。日本語の第一言語話者が発した言葉を繰り返し、日本語の発音を確認していたと考えられる。意識的に日本語の発音を発していた生徒は、比較的流暢に話すことができる。そのため、意識的に発音することが第二言語の学びにつながっていると考えられる。また、日本語の発音で発することにより、現在自分は日本語で会話をしているという志向を示していたといえる。日本語の発音に言い直すことによって、日本語の第一言語話者である聞き手に会話を合わせていた。外国人生徒は会話の中で得た知識を繰り返し発しながら、発音を確認していた。カタカナ英語を正しく発音しようとする志向があるということである。外国人生徒の第二言語の意識が円滑なコミュニケーションにつながっていると考えられる。

5. インタビュー調査

本章では、外国人生徒のカタカナ語に対する意識を明らかにするためにインタビュー調査を行った。調査を行った回答から明らかになったことは、カタカナ語に対する意識は、母語によって異なるということである。中国語を母語とする生徒は、カタカナ語を習得するのに難しさを感じている一方で、日本語より英語を得意とする生徒は、カタカナ語を習得するのは英語と単語が共通している点があるため難しさをあまり感じていないという結果であった。しかし、発音に関しては日本語と英語が混同することがあるという回答がいくつかみられた。このことから、外国人生徒の使用言語の語彙が、彼らのカタカナ語に対する意識に関わっていることが明らかとなった。また、もっとカタカナ語を学びたい、知りたいという回答が多くみられた。

6. 全体の考察と今後の課題

外国人生徒はどのような場面でカタカナ英語を英語的発音で発音するのか、また使用言語によって傾向は異なるのかなどを会話分析しながら調査を進めた。近年、カタカナ語は英語や外来語から来た言葉が急激に増加している。今後、さらに増加するカタカナ語は日本語学習者にとって課題となってくると考える。早期のうちからカタカナ語に対する意識を高める必要があると考える。

また、外国人生徒と日本語の第一言語話者の日本語会話を分析し、日本語の第一言語話者は外国人生徒が日本語と異なる発音や誤った日本語を使用していた際、それを指摘するということはなかった。実際に、日本語の誤りや間違いを指摘した場面があったが、その後の外国人生徒の会話はあまり積極的に会話することなく、日本語に対して自信を失っているようであった。このことから、会話をスムーズに進め、外国人生徒が自信を持って話ができるよう日本語の第一言語話者は日本語の誤りや間違いを指摘するのではなく、正しい発音へ自然と促すような発話が必要である。外国人生徒が言葉探しの末、カタカナ英語の場合、英語的発音で発した際、そのすぐ後に日本語の第一言語話者は自然と日本語の発音に言い直すことで、彼らは日本語の発音を理解することができる。また、得た知識を繰り返し発音することで自信につながると考えられる。得た知識を意識的に発していた生徒は比較的日本語を流暢に話していた。外国人生徒のカタカナ語の教育や意識をより深めることで、第二言語の学びが生まれ、円滑なコミュニケーションにつながっていると考える。

参考文献

- 串田秀也(1997)「6 会話のトピックはいかに作られていくか」谷泰編『コミュニケーションの自然誌』 p. 173-212 新曜社
- 陣内正敬(2008)「日本語学習者のカタカナ語意識とカタカナ語教育」『言語と文化＝語言与文化 11』 p. 47-60 関西学院大学
- 鈴木俊二(2008)「和製英語の研究：その構造と思想」『紀要 23』 p. 1-47 国際短期大学
- 須部宗生(2013)「カタカナ英語と和製英語—最近の傾向を中心として—」『環境と経営：静岡産業大学論集 19(2)』 p. 127-137 静岡産業大学
- 高梨克也(2016)『基礎から分かる会話コミュニケーションの分析法』ナカニシヤ出版
- 筒井佐代(2012)『雑談の構造分析』くろしお出版
- 西阪仰/山田富秋/好井裕明(1999)『会話分析への招待』世界思想社
- 野田尚史(2012)「非母語話者の日本語コミュニケーションの問題点」奥野由紀子編『日本語教育のためのコミュニケーション研究』 p. 85-104 くろしお出版
- 林宅男(2008)『談話分析のアプローチ 理論と実践』研究社
- 細田由利(2008)「「第二言語で話す」ということ：カタカナ英語の使用をめぐる」『社会言語科学』第10巻第2号 p. 146-157 社会言語科学会
- 堀口純子(1997)『日本語教育と会話分析』くろしお出版
- H. サックス/E. シェグロフ/G. ジェファソン 西阪仰訳(2010)『会話分析基本論集』世界思想社
- 埋橋淑子(2001)「外国人生徒に対する日本語教育の現状と課題～中学校での調査結果から～」『大阪大学教育学年法 6』 p. 41-52 大阪大学大学院人間科学研究科教育学系
- 松本明香(2002)「能動的な学習の実態：外国人生徒の日本語学習場面における会話分析」『言語文化と日本語教育 24』 p. 54-66 お茶の水女子大学日本言語文化学会研究会
- 山田敏弘(2013)『日本語音声・音声言語—多文化間コミュニケーション』くろしお出版